

幾多の優秀な科学者を輩出

帝人奨学会が六〇周年を迎える

帝人

二〇一〇年にノーベル化学賞を

受賞した米国パデュー大学特別教

授の根岸英一氏（帝人グループ名

誉フェロー）をはじめ、幾多の優

秀な研究者、技術者を輩出してき

た公益財団法人「帝人奨学会」が、

このたび創設六〇周年を迎えた。

国家・社会の発展を

担う人財育成を

理念として設立

帝人は社会貢献活動の一環として、学術・文化の振興活動を行っており、その一つに、若手科学技術者の育成を支援する公益財団法人「帝人奨学会」がある。帝人奨学会は、一九五三年（昭和二八年）に帝人創立三五周年を記念して創設されたもので、民間企業が設立

した奨学金財団の中で最も歴史と伝統があるものの一つである。

帝人創業メンバーの一人である

久村清太氏は、生涯を人造絹糸

（レーヨン）の研究に費やし、日

本で初めてレーヨンの製造技術を

確立した。そうした背景から、久

村氏は「日本化織工業の父」と呼

ばれているが、帝人奨学会は、彼

の研究開発に対する精神を継承・

発展させるとともに、国家・社会

の発展と文化創造に貢献する「若

き科学技術者の育成」を目的に、

「帝人奨学会久村奨学生制度」と

してスタートした。

奨学会が創設された一九五三年

は、新制大学制度の大学生が初め

て卒業した年であり、新制大学院

制度が発足した年でもあった。資

源の乏しい日本にとって、戦後の

国家の成長を牽引するのは人的資

源だけであったが、当時は、まだ

日本経済も戦後の復興途上であり、

現在のように企業による社会貢献

活動や奨学金制度が普及・充実し

ていなかった。

そのような状況下において、

「一企業の利益のためだけでなく、

広く国家・社会に資する若手技術

者を育成する」という理念で創設

された帝人奨学会は、学術関係者

より大きな反響が寄せられた大変

画期的なものであった。

制度創設以来、既に一五〇〇名

を超える理工系学生の研究を支援

し続けているということから考え

ても、帝人奨学会が、いかにわが

国の科学技術振興に貢献したかが

分かる。

奨学生の半数が

学究の道を選択

帝人奨学会には、創設以来、一貫した理念がある。それは、帝人奨学会が「一企業の利益のためだけでなく、広く国家・社会に資する若手技術者育成」のために存在するということだ。

そのため、奨学金を受給する学生には、就職先など卒業後の進路に義務や条件が一切無く、他の奨学金との併給も可能となっている。学業や研究に対する熱意、取り組みが優れていれば、家庭の経済的な条件なども問われない。さらには、卒業後、指定の大学や研究機関などにおいて学術研究

公益財団法人帝人奨学金

Teijin Scholarship Foundation Scholarship

获奖学生授予仪式

Award Ceremony in Shanghai



北京と上海で「中国奨学金 認定式・交流会」を開催

活動に一定期間以上従事すると、奨学金の返還も免除される。

これら全ては、先述の創設理念に基づくものであるが、「奨学会創設当時は、日本育英会をはじめとする奨学金制度のように、官民を問わず、家庭の経済的な理由によって教育機会が得られない学生の救済に力点が置かれており、帝人奨学会のような考え方は少なかった」（白羽優・帝人奨学会事務局長）という。

このように、一貫して、日本の科学技術振興に資する人財育成を目的としているため、奨学金支給に際しても、さまざまな研究分野を代表する著名な大学教授陣による厳正な選考が行われ、競争率は三倍と、奨学金制度としては異例の厳しさである。その結果、帝人奨学会は、その狭き門を通過した優秀な学生が受給する奨学金としても広く認知されており、一五〇〇名を超える奨学会OBのうち、「半数近くは大学の教授や研究員など、いわゆる学究の徒となっており、二〇一〇年にノーベル化学賞を受賞した根岸英一氏をはじめ、

多くのOBが著名な大学教授や研究者、政府や民間企業の役職者などとして活躍している。」（白羽事務局長）という。

現役の奨学生達も「研究への姿勢や情熱を評価してもらえる」「選考時に、著名な先生方から今後の研究に役立つアドバイスや新たな視点をもたらえた」など、若い科学技術者の育成という奨学会の理念に共感・感謝しているようだ。

六〇周年を契機に、 更なる飛躍を目指す

帝人奨学会は、創設時に掲げた理念を変えることなく発展を続けており、創設翌年（一九五四年）には、一企業に偏らない機関による運営を目指して財団法人化し、二〇一一年には公益財団法人として認定された。

国内においては、奨学生の動機づけや、大学や専門の異なる奨学生同士の人財交流促進、現役奨学生・奨学会OB同士のネットワーク構築などを目的とした、「帝人久村奨学生交流会」を実施している。

また、近年は、「若き科学技術者の育成」という理念をグローバルに具現化すべく、二〇〇五年に、日本の大学・大学院に在学中の外国人留学生を対象とした奨学金給付を開始し、二〇一〇年には、中国における奨学金制度を創設した。これは、中国の北京大学、清華大学、復旦大学、上海交通大学の学生を対象に学費と寮費を賄うのに十分な奨学金（年間八〇〇〇元）を給付するもので、二〇一三年で奨学生の累計は一〇〇名を超えるという。

さらに、二〇一二年からは、日本国内と同様に、中国の奨学生の動機づけや、大学や専門の異なる奨学生同士の人財交流を図るため、北京と上海において「中国奨学金認定式・交流会」を開催しており、「広く国家・社会に資する若手技術者の育成」という理念に則ったさまざまな支援施策を国内外で展開している。今後は、中国に留まることなく、タイ・インドネシアといったASEAN地域への支援拡大も検討している。

「世帯所得の低下」や「雇用情

勢の悪化」などが叫ばれ、若手科学技術者を取り巻く環境が依然として厳しい状況にあるが、将来の科学技術を支えるには、優秀な若手技術者の力が不可欠となるため、帝人奨学会は今後も国内外で奨学金事業を末永く運営することで、創設当初より変わらない理念である「科学技術振興に資する人財育成」の実現を目指していく。

創設六〇周年

記念イベントで

若手研究者育成の

意義を再確認

帝人奨学会の創設六〇周年を記念して、九月二十七日（金）には東京でシンポジウムの開催が予定されている。奨学会OBで、二〇一〇年のノーベル化学賞を受賞した根岸英一氏による特別講演のほか、根岸氏をはじめとする著名な科学者・研究者をパネリストに迎え、「イノベーションが世界を変える、世界をリードする先端科学技術者の育成」をテーマとしたパネルディスカッションなどを予定しており、奨学会の理念である

「若い科学技術者育成」の意義について、改めて世の中への訴求を図る。現役奨学生や奨学会OB、

著名な大学教授や研究者ら、三〇〇名超が集う一大イベントになりそうだ。



「日本化繊工業の父」と呼ばれた久村清太氏

久村清太は、いまから一〇〇年以上前、化学繊維がまだ海のものとも山のものとも分からぬ時代にその研究に没頭し、独自の力で、日本で初めて化学繊維（レーヨン）の製造技術を確立した研究者である。

帝国人造絹糸株式会社（現・帝人株式会社）が設立された大

正七（一九一八）年に、海外技術を導入するため、欧米へ渡航し、多くの技術を持ち帰り、同年に帝人の取締役に就任。その後、帝人の社長に就

任し、昭和一二（一九三七）年には、帝人一社でフランス一国のレーヨン生産量を凌駕するほどの規模へと育てあげ、「日本化繊工業の父」と呼ばれるようになる。これ以降もレーヨン製造の研究に精魂を傾け、その生涯をわが国の繊維産業の発展に捧げることになる。日本では、まだ化学繊維の有用性が分からなかった当時、久村の歩みが日本の繊維産業の歩みそのものであった。

（出所・帝人奨学会）